

小学1年生から始めて、大学入試の小論文、現代文まで。一貫した指導で作文力、国語力がつく。

中学入試、高校入試の受験作文にも対応できる幅広い言葉の森の作文指導。

1. 小学校1年生の作文は、読む力をつけることで自然に直す

小学1年生のころは、まだ作文を上手に書くことができません。聞く生活には慣れていますが、読む生活には慣れていないので、「わ」と「は」の区別などもよくできません。また、会話にカギカッコをつけるということも、読む生活が増えてきて初めてわかることなので、最初はできないのが普通です。

このような時期に言葉の森で作文を書く練習をするのは、楽しく書く習慣をつけるためです。

作文自体は、ゆっくりと正しく書けるようにしていけばいいのですが、読む勉強は書く勉強よりも先行して進めることができます。

作文の勉強というと、文章を書かせてそれを直すというやり方を思い浮かべがちですが、小学1年生の場合はそういう勉強法はあまりいいやり方ではありません。むしろ、長文暗唱や読書や読み聞かせでたっぷり日本語の読みと聞きの力をつけ、それが作文に反映されるようになるまで、褒め続けてじっと待つという勉強の仕方をしていくのです。



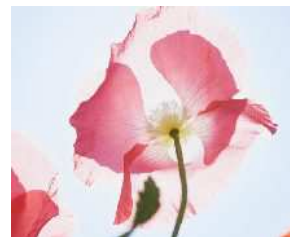
2. 小学2年生は、作文の勉強が軌道に乗る時期

小学校2年生は、書く力が安定してくる時期です。また、学校生活にも慣れてきます。そして、勉強の習慣をつけやすい最後の時期です。

作文については、楽しんで書かせることが大事です。この時期に他人と比較することは意味がありません。小学校2年生で文章が上手な子は、例外なく本をたくさん読んでいます。文章力は読む量に比例していますから、作文に弱点があった場合でも、作文で直すのではなく読書で直すと考えておくことが大切です。

小学2年生のころは、面白く読める本はたくさんあります。この時期に本を読まないという子はまずいません。しかし、そういう時期のうちに、読書は勉強の中でいちばん優先して取り組むものだという考えを持たせることが大事です。つまり、どんなに忙しい日があっても、読書だけは毎日欠かさないという生活を送っていくということです。

このように、小学校2年生のうちに、作文、自習、読書などが生活の中に溶け込むようになると、その延長で、高学年まで作文や読書の勉強を続けていくことができるようになります。



3. 小学校3年生、4年生は、作文を上手に書ける時期

小学校3年生、4年生のころは、作文を上手に書ける時期です。

これは、子供たちが学校生活に慣れてくるとともに、書く力もさらに自由に使えるようになってくるからです。このころはギャングエイジとも呼ばれるとおり、作文にもいたずらっぽく楽しさが出てきます。**小学校3、4年生の子供たちは、表現の工夫を楽しんだり、内容の面白さを意識して作文を書こうとしたりします。**

この時期の作文指導で、大事なことは三つあります。

第一は、表現の工夫を楽しむ指導をすることです。例えば、たとえを使ったり、ダジャレを使ったりして書く練習をします。

第二は、出来事を個性的に書く指導をすることです。この時期は、子供自身にも面白いこと書こうとする意識がわいてきます。時には、家族の話をおもしろく書きすぎることもあります。あまり目くじらを立てないことが大切です。

第三は、感想を個性的に書く指導をすることです。感想の個性は、大人との対話の量に比例しています。お父さんやお母さんがいろいろな話を聞かせてあげると、それに比例する形で、子供の感想を書く力も深まってきます。



4. 小学5年生、6年生は考える力のある作文を書く時期

小学校5年生、6年生は、考える力が育ってくる時期にあたります。それは、このころから物事を構造的に考える力がついてくるからです。従って、文章の要約などができるようになるのも、この小学校5、6年生のころからです。物事を構造的にとらえる力がついてくるので、作文の構造も、立体的なものになります。立体的な作文とは、単に時間の順序に書いていくのではなく、過去にさかのぼったり似た話と結びつけたりしながら展開していく作文です。

小学校5、6年生のころは、作文以外の算数、理科、社会などでも、考える要素が出て難しくなる時期です。**従って、小学生の勉強は、小学校5、6年生からが本当の勉強らしいものになります。**

小学校5、6年生で伸びる子は、小学校3、4年生のころに実力を蓄えた子です。例えば、小学校3、4年生までの時期に本をたくさん読んだ子は、速読力がついてきます。これが小学校5、6年生の国語力の基礎になっていきます。



5. 中学生は意見を深める時期。言葉の森で考える作文を書く練習を

中学生は、意見を深める時期にあたります。言葉の森では、中学生は意見中心の作文を書く練習をします。

しかし、中学生の時期は、書くのが苦手になる時期でもあります。その理由は第一に、作文の勉強というものが学校で行われなくなるので、勉強の意義を感じにくくなるからです。ただし最近では、高校入試の推薦で作文の試験が課せられるところも増えています。

第二に、中学生のころは、作文のような内面に関わることは身近な人に読まれたくないという時期だからです。

第三に、いちばん大きい理由は、意見文を書くのにふさわしい語彙がまだ備わっていないということです。中学生の時期は、読む力があるほどには書く力がないという時期なので、文章を書いていて、自分の文章がうまくないと漠然と感じてしまうのです。

このため、中学生は大部分の生徒が小学校5、6年生のときよりも作文が下手になるというような印象を受けます。ただし、それは書くジャンルが違うからです。例えば小学校5、6年生のときは、「私のあだな」という題名で実例を中心に作文を書いています。中学生になって、「あだなはよいか悪いか」という題名で意見とその理由を書くという書き方をすると、語彙力が育っていない時期はどうしても内容がものたりなくなってしまうのです。

しかし、中学生のころに上手に書ける子ももちろんいます。その子たちの共通点は、読書量があることです。



6. 高校生が国語力をつけるためには過去問が最適

高校生が、国語力の土台となる読解力をつけるためには、全国の大学の過去問1年間分の問題集を讀んでおくことです。読んでいて内容がつかめない意味不明のところだけ、国語の先生などに聞いておきましょう。

テストの成績を上げるためには、三つのことが大事です。

第一は、問題文の全文を、一息で、味わいながら、ところどころに線を引きながら、読んでいくことです。物語文などでは、特にこの味わって読むことが大切です。問題文の世界に没入して味わって読むと、そのあとの選択問題を答えるときにも、改めて問題文を読み返す必要がなくなります。

第二に、選択問題の解き方です。選択肢のどこがなぜ違うのかということを記録に残しながら解いていきます。記録を残さないで解いた場合、うまく合っていても力がつきません。間違っていた場合でも、なぜ間違えたのかということが反省できなくなります。他の教科と同じように、**国語も理詰めに解いていくことで力がつきます。**

第三に、志望校の過去問の性格を知ることです。

過去問の性格とは、わかりやすい性格、ひねっている性格など、問題自体の性格のことです。志望校の過去問の性格を知っていると、選択に迷ったときに、役に立ちます。



7. 帰国子女の作文入試対策は、家庭での対話で考えて書く力を育てること

帰国子女枠での作文入試では、作文によってその生徒の基礎学力を見るとともに、家庭における教育力を見るねらいもあります。

海外生活で何を経験したかということは、子供によってそれほど大きな差があるわけではありません。しかし、その経験がその後の自分の人生にどう生かされているかということは、考えたことのない子には書けません。

そのような考えを子供が自然にするようになる年齢は、もっとあとです。そこで、家庭でその経験を話し合う必要があるのです。

帰国子女ですから、日本語の表記力そのものはそれほど厳しくは問われません。しかし、考える力そのものは、何語で考えても自然に出てきます。**日本語で深い考えができない子は、英語でもほかの言葉でもやはり深い考えはできません。**

考えの深さは、主に両親との対話の中で育ちます。帰国子女入試で作文対策をする場合、まず家庭でいろいろなテーマについて話し合う習慣を作っていくことが大切です。



8. 読書の習慣をつけることによって、一生学び続ける姿勢ができる

今日の社会は、ますます流動化しています。

学校の成績は、小、中学校のころまでは親の勉強のさせ方次第で、ある程度上位を占めることができます。しかし、高校、大学と進むにつれて、本人の努力や実力が大きく物を言うようになってきます。

P・F・ドラッカーは、これからの企業の平均寿命は30年程度だから、人間が持っている知識の寿命の方が、勤める企業よりもはるかに長くなるだろうと述べています。

勉強をして、いい成績を上げて、いい学校に入ったらそれでおしまいというのは、過去の時代の話です。これからは、時代の変化に応じて新しい知識や技能を次々と学んでいく形が日常化していきます。

今有利な資格や学歴というものは確かにありますが、一生有利な資格や学歴はない、と考えておくことが大切です。

この継続して学ぶ姿勢に最も関連が深いのが、毎日の読書の習慣なのです。

